

99

The Essentials of Medicine in Ancient China and Japan —Yasuyori Tanba's *Ishinpo* について

誌上发表

宮川 隆弘

日本鍼灸研究会

『医心方』の英訳を中心に古代の日本の医学を紹介した本書は、1986年にオランダのE. J. Brillより刊行された。全2冊で、翻訳ならびに序論と注釈は、Emil C.H. Hsia, Ilza Veith, Robert H Geertsmaが担当している。大鳥蘭三郎の序文によれば、Emil C.H. Hsiaは、『医心方』の伝本を実見するため、宮内庁書陵部や仁和寺などに訪書している。またIlza Veith (1912~2013年)は、1949年初刊の“Yellow Emperor's Classic of Internal Medicine”の筆者である。アメリカのジョンズ・ホプキンス大学において医学で博士号を取得した最初の学者で、多数の著作と論文がある。アメリカにおける東洋の医学史研究の先駆者であり、中国の医学のみならず、日本の医学も研究している。1970年代に順天堂大学から名誉博士号を授与され、1976年発行の『日本医史学雑誌』第22巻第1号に“American Medicine Two Hundred Years Ago”を発表、同巻第2号に緒方富雄による日本語訳が掲載されている。

本書の第1分冊は、大鳥蘭三郎、大塚敬節らによる三つの序文に続いて、各巻の内容の略述と日本古代医学についての序論が置かれている。序論では、日本の古代医学についての解説があり、隋唐を中心とする中国文化の受容により、中国医学を基調とする日本独自の医学が形成されたと述べている。また『医心方』の伝承について述べ、伝本や引用書などを年表にまとめている。最後に巻二十六における専門用語を表にして、薬物の異名、中国薬物の様々な西洋の識別、中国薬物の西洋の識別における相違をまとめ、更に原文の文字の相違例を表にして、ページ数・行、原書の文字、訂正文字の順に列挙している。

第1分冊では巻一と巻二の2巻が翻訳されている。巻一の治病大体第一から薬不入湯酒法第八までは、概ね原文通りに訳され、文中または脚注で書籍や専門用語に漢字を交えて詳細な説明が加えられている。薬畏悪相反方第九では、一連番号を付した薬物名と、その薬物に対する相使、相反、相畏、相悪、相須、相殺の薬物を表形式で示している。諸薬和名第十は薬物の和名を述べるという内容のためであろうか、翻訳されていない。巻末には、原文には無い、索引書の説明が附加されている。巻二では概要に続いて本巻の翻訳が始まるが、必ずしも巻頭から逐語的に訳されているわけではなく、孔穴主治法第一ならびに鍼灸服薬吉凶日第七から月殺厄月衰日法第十では、表形式が採用されている。本巻の過半を占める孔穴主治法第一では、孔穴名（漢字、ピンインを併記）、所属経絡、刺入深度、留鍼の呼吸数、施灸の壮数、取穴法、主治、そして禁鍼・禁灸の訳に加え、原文には無い現行の主治が附されている。また明堂図第十二では、末尾に巻二十二・任婦脈図月禁法第一に見える図を載せているが、これは必ずしも適切とは言えない。

第2分冊では、巻二十五（小児）、巻二十六（養生）、巻二十八（房内）が翻訳の対象となっている。いずれの巻でも理解しやすいように表現上の工夫がなされ、思想的な背景についての注解も附加されていて、非常に読みやすい。とりわけ巻二十八では難解な解剖用語などが表形式を使って解説されている。

本書における『医心方』の翻訳は全30巻のうちの僅か5巻に過ぎないが、訳文中の専門用語、書籍には漢字を加え、脚注や後注でも歴史、書誌、言語などの諸成果を踏まえた水準の高い解説が行われている。英語圏の研究者が中国及び日本における古代の医学を考究する上において重要な著作であると考えられる。